

# 1 担い手育成と種苗増殖法の転換によるながいも産地力の強化

## 【概要】

- J Aと連携した現地検討会等の実施により、ながいも栽培の基本技術の徹底を支援した。
- 担い手育成塾生を対象として、生産技術チェックシートを活用した個別指導や育成塾を開催し、栽培管理の改善を促した。
- 種苗供給体制の確立に向け、ウイルス検査や新品種実証ほ等を設置し切いも体系への転換を支援した。

## 【背景・課題】

- チェックシートを活用した聞き取り調査で、塾生ごとに異なる課題が挙げられたことから、それらに応じた個別の技術指導により栽培技術の向上を図る必要がある。
- 現状の「むかご」による種苗増殖方法では品種本来の特性を維持することが難しいことから、品種特性を維持できる「切いも」体系へ転換する必要がある。
- 生産性向上に向け、従来品種に比べ短くコンパクトな新品種の検討が必要となっている。

## 【普及指導活動の内容】

- 担い手育成塾生を対象に、「ながいも生産に関するチェックシート」を活用し、個別巡回指導を行った。また、育成塾やJ Aの講習会において、天候や生育状況に応じた追肥時期、追肥量の加減や、病虫害防除の指導を行った。
- 「切いも」体系による生産の実証ほや新品種「夢雪」の栽培実証ほを設置し、切いもの増殖方法や品種特性に合った栽培技術確立のため、関係者での検討会を開催し、特性や栽培方法について検討した。
- 種苗生産ほ場（種いも生産）においてウイルス罹病株の見分け方や抜取を指導し、ウイルス検査を行った。

## 【成果】

- チェックシートで確認した結果、個々の課題が指摘できたことで、塾生が課題を認識し改善意識の向上につながった。また、講習会等により、気候変動に応じた追肥判断や、病虫害多発時の農薬の選択方法等が理解された。
- 新品種「夢雪」の現地実証により、品種特性であるコンパクトな形質が確認されたほか、地域や土質による形状差があることも明らかとなった。
- 優良種苗生産では、ウイルス罹病株の見分け方や注意すべき防除対策が理解され、優良種苗の生産につながった。

## 【対象者】

- ① J Aゆうき青森ながいも担い手育成塾生（20人）
- ② J Aゆうき青森野菜振興会種子部会（10人）



担い手育成塾生個別指導（9/9）



ながいも新品種等成績検討会（12/17）



採種ほウイルス検査（9/5）

## 2 新規就農者の定着と経営管理能力の強化

### 【概要】

- 重点指導対象者を十数名選定し、個別課題の解決に向けて伴走支援を継続した。
- 「ヤングファーマーゼミナール」を開催し、先進地視察研修を行ったほか、基礎技術の習得及び経営管理能力の向上を支援した。

### 【背景・課題】

- 管内では、法人雇用就農を除く直近3か年の新規就農者数は減少傾向にあり、経営開始資金の活用者も限定的な状況である。
- これまで、重点指導対象者を選定し濃密な支援を行ってきたが、対象者からは継続的な支援や迅速な情報提供が求められている。
- 新規就農者等の早期育成と定着に向けて、基礎的な生産技術の習得と実践的な経営管理能力の向上を支援する取組みが求められている。また、農業士会と連携し、地域の生産体制に対応した栽培技術の習得や経営管理能力の向上、仲間作りを推進し、安定した自立経営が可能な農業者の育成を図る必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 重点指導対象者に対し延べ90回以上の巡回・面談を実施し、技術及び経営両面からの伴走支援を行った。
- ヤングファーマーゼミナールを年間計画に基づいて実施した。土づくり、農薬の使い方、堆肥活用に係る営農基礎講座を計3回・延べ4日、農業士会と連携して、寅福プラント（むつ市）及びジョイントファーム（六戸町）への先進地視察研修を1回、農作業安全等研修を1回、農業経営研修を3回、延べ7日開催した。

### 【成果】

- 重点指導対象者に対する継続的な支援により、個々の技術課題の整理と改善意欲の向上が図られた。
- ヤングファーマーゼミナールは、重点指導対象者を中心とした参加誘導と、就農後間もない生産者の掘り起こしにより、参加者を確保した。また、農業経営アドバイザーによる農業経営研修では、経営分析シートに基づく振り返り実習やミニ相談会を通じて経営管理能力の向上を図ることができた。

### 【対象者】

就農5年以内の農業者、農業次世代人材投資資金等受給者（25人）、青年等就農資金借入者（35人）、法人雇用就農者、就農希望者、準備型研修受講者（1人）



市町村のサポート巡回と連携した、重点指導対象者に対する個別巡回活動（9/29、三沢市）



オランダ型ハウスのトマト植物工場を経営する寅福プラントを見学した先進地視察研修（9/5）



農業経営アドバイザーによる経営分析手法を取り入れた農業経営研修（3/25）

### 3 技術改善と基本技術の徹底による大豆の生産力強化

#### 【概要】

- 生産情報の提供、大豆生産者座談会・栽培講習会の開催及び実証ほの設置等により、適期作業と基本技術の徹底を支援したほか、大豆栽培技術改善策整理票の作成を通じて各経営体の課題を洗い出し、技術改善の取組を支援した。

#### 【背景・課題】

- 大豆の収量は年次変動が大きく安定した所得の確保が難しいことから、経営体に合わせた効果的な技術改善策の導入により、生産性の向上を図る必要がある。
- 上北管内では県の指導要領より栽植密度が疎植な経営体が多いことや作業時期の遅れによる雑草の多発等の課題があるため、基本技術の徹底が必要である。

#### 【普及指導活動の内容】

- 生産情報誌「だいでず通信」を発行し、生育調査結果に基づいた作業適期の情報を発信し、基本技術の徹底や適期作業の実施を支援した。
- 経営体ごとに大豆栽培技術改善策整理表を作成し、整理表に基づいた技術改善を提案するとともに、導入を支援した。
- 上北地域大豆生産者座談会を開催し、令和7年度の大豆の生育概要や新たな雑草管理技術による除草効果を検証する実証ほの成果、大豆栽培におけるスマート農業技術の活用方法等の情報提供並びに生産者間での意見交換等を行い、大豆生産者の技術力向上を図った。

#### 【成果】

- 生産情報誌「だいでず通信」は、経営体の作業計画に役立てられ、使用薬剤や作業時期の見直しにより、栽培管理の適正化が図られた。
- 10経営体において、栽植本数や除草体系の見直し等の技術改善に取り組んだ。対象12経営体の平均収量は178kg/10aと、基本技術の徹底と経営体に合わせた技術改善策の導入が効果的であることが確認された。

#### 【対象者】

- ①集落営農組織（3組織）
- ②大規模生産者（9戸）

計12経営体



茎葉処理除草剤の早期散布実証ほ



適期刈取指導(11/5)



大豆生産者座談会(2/27)

## 4 水稻生育障害発生水田における主食用米安定生産

### 【概要】

- 令和6年5月の田植え後に、海水の流入が原因と考えられる水稻の生育障害が発生したことから、水田土壌の塩類濃度を把握するとともに、関係機関と連携し、農業者の除塩作業の実施を支援した。

### 【背景・課題】

- 令和7年3月に全68ほ場の土壌ECを測定した結果、12ほ場が除塩が必要となる基準値0.5mS/cm以上であった。塩類濃度障害を回避するためには、石灰資材の散布による除塩作業の実施と、生育状況に応じたきめ細かな肥培管理を指導する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 水稻育苗講習会において、除塩作業の実施と丁寧な代かき、栽植株数の確保、雑草防除の徹底を指導した。
- 除塩作業実施後に土壌ECを測定し、全ほ場の塩類濃度が基準値以下に低下したことを確認し、結果を農業者に情報提供した。
- 町、JA、土地改良区、共済組合、県（農業普及振興室・農村計画課）、農林総合研究所で構成する「関係者連絡会議」を開催し、土壌分析結果や生育状況について情報共有するとともに、今後の対応を検討した。
- 令和6年度に被害が著しかったほ場2か所の生育調査を行い、生育状況と技術対策について土地改良区に情報提供するとともに、個別に現地指導を行った。

### 【成果】

- 町が独自に石灰資材の購入や燃料代への補助を行うなど、関係機関が一体となって除塩作業を指導した結果、除塩が必要な農業者6名全員が石灰質資材の散布による除塩作業を実施した。
- 除塩作業ときめ細かな肥培管理が行われたことにより、生育量が十分に確保され、生育観測ほ場の坪刈り収量は10a当たり13俵以上となった。また、1月に実施した聞取調査結果でも、地域の平均収量は10a当たり約10俵となった。
- 地域の作柄が回復したことから、関係機関連絡会議で検討した結果、来年度からは通常の栽培管理とすることで一致した。

### 【対象者】

おいらせ町日ヶ久保地区の稲作農家  
(16人)



水稻育苗講習会 (4/23)



水田土壌採取 (5/12)



豊かに実ったほ場 (9/12)